

学校長御留書

加古川市立志方東小学校
令和5年度
学校便り夏休み特別号
第11号
R5.8.10発行

地域振興 切り花産地の復活へ一歩

切り花産地の復活へ一歩 お盆向け、ケイトウ出荷ピーク

ケイトウを取締する志方東営農組合の女性ら
いずれも加古川市志方町広尾



出来栄えに手応え、来夏はリンドウも

志方東営農組合が今年初栽培

加古川 加古川市志方町広尾で、お盆に併せて供えるケイトウの出荷作業が、最盛期を迎えている。地元の志方東営農組合が今年初めて栽培した3・8坪の畑は、約8千本が鮮やかな深紅の花を咲かせた。同組合の女性らが丁寧に切り取り、長さや色をそろえている。来夏はリンドウの出荷も予定する。東播磨地域はかつて県内有数の切り花産地だったが、現在は栽培家がほとんどなくなっており、復活への一歩となる。(斎藤 圭)

きつかけは今年1月、綿花を栽培している関係で取引のあった姫路市花卸売市場（姫路市）から、切り花生産者を持ちかけられたことだった。

同組合代表理事の丸山良作さん（71）は、「最初は花なんて作れるのかなと思って」と振り回す。米を作るには不向きな畑があることから、栽培に踏み切ったという。

3月には、県加古川農業改良普及センターの職員を講師に、栽培講習会を催し、同組合の女性たちが受講。JA兵庫南に種から芽出ししてもらったケイトウの苗を、5月下旬に定植した。梅雨に一定の雨量があったため、水やりの必要はなかった。同組合として初めての栽培だったが、手間はそれほどこからなかったという。

7月24日から出荷を開始。刈り取ったケイトウを、40〜70秒の10分刻みで切りそろえ、同長さを10本ずつ縛り、束にする。

ついでに束を束ねて、トラックに積み込む。作業は、今年10月ごろまでがピークという。

姫路市花卸売市場の石橋洋輔取締役は、「元の土壌は、茎の硬さ、太さもよほど使い勝手がいい。葉生葉を持ちかたも評価する。」

丸山さんは、「こんなにきれいにできるのは驚かされた。栽培してよかった」と手応えを口にす。同時に、時期に植えたりンドウは生産を止め、来年から収穫を予定している。

同センターによると、1980年代ごろまで、加古川市、稲美町は主にカーネーションの、明石市ではカーネーション、明石市ではガーベラ、キクなど多品目の栽培が盛んでしたが、担い手の高齢化や畑の宅地化などを受け、現在は生産者が激減しているとか。志方東営農組合代表理事の方は、「地元女性の働く場にも



ケイトウの長さを切りそろえるなど、出荷作業に出る女性

なり、地域振興になっている。これからもできるだけ切り花栽培を続けたい」と話しておられるそうです。（8月8日付神戸新聞朝刊より）

すくすく育っています 3年生田植え体験後の様子

1学期に地域のボランティアの方のご協力を得て実施しました3年生環境体験学習の一環である田植え。あれから約2か月半が経ち、どうなっているのか、見に行ってきました。稲が70、80cmぐらいに育ち、青々としていました。撮影した日は、九州付近に接近していた台風6号の影響で風があり、稲穂が波のように揺れていました。無事稲刈りが済むまでまだまだ台風の到来がありますが、子どもたちには自分たちの知らないところでボランティアの方がお世話してくださっているからこそその稲の育ちだということを、しっかり伝えていこうと思います。この後、環境体験学習は、かかし作り、稲刈りと続きます。

